

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊六号

巻頭の言葉

うけがたき人身をうけ、あいがたき仏法にあえり。無常念念にいたり、老少きわめて不定なり、やまいきたらん事かねてしらず、生死のちかづく事たれかおぼえん。もつともいそぐべし、はげむべし。念仏に三心を具すといえるも、これらのことわりをばいせず。

法然上人 愿仏往生

義』より
(意訳)

受けがたい人の身を受け、遇いがたい仏の教えにめぐり遇うことができました。この世の無常は刻々と迫り、死の訪れは老若を問うことがありません。すでに病に冒されていることも知らぬまま、生死の境が間近にあることも誰一人として気づいていません。とにもかくにもなんとか安心立命を急がねばなりません。安心立命を得ることに励まねばなりません。お念仏を称えるにあたって具えるべき「三心」といわれる心もちも、この道理に違つた必要から説かれたことではありません。

仏教の話

◎ 「念仏に三心を具す」、く なむあみだぶつ」と称えて、極楽に生まれる人には、称える人の心、気持ちに三つの側面の有様があるといわれます。

「三心」というのは、お念仏しているときの心遣いの有様を三つの側面から表わした経説(お釈迦さまの言葉)です。

経説

佛、阿難及び善提希に告げたまわく。
上品上生の者とは、若し衆生有つて彼の國に生まれんと願う者は、三種の心を發して、即便わち往生す。
何等をか三と爲す。
一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。三心を具す者は、必ず彼の國に生ず。」

この文章は、お釈迦様の言葉を漢訳したものを書き下した文です。

夏号
平成二十七年
七月十二日



東大寺四聖御影図～図左上から時計回りの順で「聖武天皇」「菩提僊那僧正」「行基菩薩」「良弁僧正」(行基菩薩は当寺を開いた方と伝わっています)

『忍説観無量壽經』という經典の中にあります。

阿難」というのは、人の名前で、「アーナンダ尊者」というお釈迦様の十大弟子の一人です。お釈迦様によつて「多聞第二」と呼ばれ、常にお釈迦様のおそばに付いて、身の回りのお世話をしたり、人との面会の便宜をはかつた方で、今で言えば「秘書」のような役割をしていた方だと思われます。

「多聞第二」というのは、お釈迦様

がつけた称号の様なものと伝わっています。お釈迦様の言葉を誰よりも多くおそばで聞き、記憶して忘れない徳を持った方です。釈尊が涅槃に入られておかくれになつたのち、お弟子の阿羅漢の聖者の方々が經典の編纂に携わつた時の中心的な役割をした方です。阿難尊者が「このように私は聞きました、…」と記憶を述べ、他の百人の聖者が「確かにそうでした」と確認した事にはじまり、たくさんのお釈迦様の説法の記憶

が口伝によって伝持され、今に伝わる膨大な量の経典が出来たのです。

◎ まごころから、信じねがって、阿弥陀仏の国土に生まれたいと欲して」

まごころから、信じねがって、阿弥陀仏の国土に生まれたいと欲して「南無阿弥陀仏と称える、この行為が、三心を具えた念仏」です。

お釈迦様は、先ほどの【経説】の段の言葉で、念仏をするときの三つの心遣いを説いて、この気持ちになれば阿弥陀さまの本願の力によって必ず極楽国土に生まれて阿弥陀仏に遇う事が出来ると述べています。

念仏をするときの三つの心持ちが

- 一、至誠心
- 二、深心
- 三、回向発願心

ですよと説かれているのです。

まごころから、信じねがって、阿弥陀仏の国土に生まれたいと欲して「これが、三つの言葉の意味です。すなわち、

- 一、至誠心「まごころから、
- 二、深心「信じねがって、
- 三、回向発願心「阿弥陀仏の国土に生まれたいという欲をもって、

ということなのです。

この、まごころから、信じねがって、阿弥陀仏の国土に生まれたいという欲をもって、お念仏をする、この教えは、たしかどこかで聞いたことがあるなあ、と感じた方もいらつしやると思います。

そうです、【説無量寿経】の第一卷に説かれている阿弥陀さまの四十八の本願の第十八番目の文章です。
設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺」という言葉です。

書き下しにすると、
もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我が國に生まれんと欲して、乃至十念せんに、もし生まれずんば、正覺を取らじ」となります。

意訳すれば、
もし将来、私が仏陀になったあかつきには、十方のすべての生ける者が、まごころから、信じねがって、我が国土に生まれたいと欲して、少なくとも十遍念仏をして、もしその生ける者が生まれないうちは、私は正しい覺りを取りません」と、なります。阿弥陀さまは、今から十劫（この私たちが住む世界が生成してから消滅するまでの時間の十倍ほど）以前に、仏陀となった方ですか

ら、今現在、少なくとも十遍のお念仏で、阿弥陀さまの浄土に往生させて頂けるお力を持ち、その道理をお悟りになつている仏様が、阿弥陀仏なのです。

ただし、「三心」というのは、お念仏をしているときの心の状態、心遣いのありさまのことを言いますから、この「三心」という言葉に、こだわると、かえって迷ったり、悩んだりしてしまいます。

そうではなくて、
まごころから、信じねがって、我が国土に生まれたいとねがう「気持ちには、南無阿弥陀仏」なむあみだぶつ」と声に唱えることによって、自然に、だんだんと、そのような心持ちになつてくる、という事が、真実の現象なのです。先に、この三つのところばえをそなえるように努力してから、念仏を申そう、とか、念仏申しているときに、三つのようなところばえになつていなさそうなので、これではこのように念仏しても、極楽世界に生まれるかどうか不安です」というように思いわずらうのはかえって「自力」の心構えです。他力の道」をゆくうえでは、全く超越し苦勞の氣遣いであるから、お念仏をしていてそのような思いが出て

きても、根拠のない妄想ですからかまわず念仏をとなえつつけるだけで、そのような妄想も少しずつ消えて、阿弥陀様のご功德、無量寿・無量光の「喜び」を少しずつ頂く事が出来る、と思つてただひたすら唱えるのみと了解すべきなのです。

いかえますと、どのような心の状態であつても、唱える「南無阿弥陀仏」によつて、必ず極楽世界に生まれることができると思つて、なむあみだぶつ」と唱えれば、となえつつけているうちに、わるくていやなわが心の状態がだんだんと、

まごころから、信じねがって、我が国土に生まれたいとねがう「気持ちになつてきて、楽ですがすがしくなつてくると受け止めるのです。これが、阿弥陀様のご本願の不思議な功德とのお伝えです。

法然上人のご教示にこうあります。
只、往生極樂のためには、南無阿弥陀佛と申してうたががなく往生するぞと思ひ取りて、(南無阿弥陀佛と)申すほかには別の子細そうらわず「只、往生極樂のためには、南無阿弥陀佛と申して、(それでこの人生のつとめがおわつたときには)うたががなく往生するぞと思ひ取つて、(南無

阿弥陀佛と申すほかには、特別なこまかな心得るべきことはありません。というお導きです。

このお言葉は、「一枚起請文」という上人のおことばですが、この次にこのように続きがあります。

ただし、三心四修ともうすことので、そうろうは、皆決^{けつ}定^{じょう}して南無阿弥陀佛にて往生するぞと思ふ内に纏^もりそろうなり。」

くただし、三心(お念仏をするときの心づかいの有様)ですとか四修(お念仏の修め方に四つあります。

- 一敬つて唱える、
- 二他の修行をしない
- 三唱え続ける(生活、仕事上の必要な行為以外、念仏はなるべく多く隙間なく唱える)

四人生の終わりの瞬間まで唱える。くくわしくはべつの機会にお話ししようと思ひます。」といわれる事がありますが、これらは、みな、気持ちが定まつて、南無阿弥陀佛によつて自然に往生するぞと思ふころの内に、すべて自^まづからそなわつてゐるのです。く

というご教示です。

お念仏をしているときの心持ち、「三心」と聞くと、大層なように感じま

すが、要するに、「南無阿弥陀佛」と唱え続けられ、だんだんと「南無阿弥陀佛」と唱えている時の自分全体の状態が、そのまま、必ず、阿弥陀様の極楽世界に往けるのだと思つて申せば、本当に阿弥陀様のことを喜ばしくて心強く思える心地が芽生え、さらに申す内にそのような気持ち自然に育てられて申すだけの事だということです。

こうして唱えるようにすれば、念仏の徳として不思議に心の罪悪感や垢などの余計なもの(妄念)が静まり、静かな安定した気持ちになつて、極楽にうまれるのが待ち遠しい」と喜び勇む気持ちにまでなれる道がお念仏の道だとの伝わりです。

平成二十七年 善導寺

これからの行事・予定

これからの当寺での行事・催事の一案内です。ご都合がつかねば、気軽に越し下さい。

○毎月第 一 土曜日午後二時～三時半
浄土宗のおとどめ作法教室

皆様の「家庭にはお仏壇」があると思ひます。毎朝のおとどめ」のより良し

かたが分かります。

○毎月第三日曜日午後二時～三時半
詠唱の集い

念仏往生」の教えのおもむきが、歌を通して自然に覚えられ、念仏往生」の助けとなる業になります。

○毎月第四土曜日午後二時～三時半
お念仏修養会

正式には 別時念仏会(くつしねんぶつえい)と云います。日時をあらかじめ決めて、気持ちを新たにしてお念仏を致します。

○八月十一日 大施餓鬼会

○八月十六日

第2次世界大戦終戦70周年戦没者追悼式

お盆の最終日午後2時に行います。

送り盆」等でご来寺の節は、是非ともご参列ください。

○九月秋分の日を中心とした一週間 秋期彼岸会

動きやすい、気候に合った暖かさの服装でご出席下さい。お袈裟輪袈

袈、わけぎ」と云います)とお数珠は、お持ちの方はご持参下さい。お持ちでない場合は、在庫がありますので、お申し出下さい。

行事以外の毎月定例の集いは、出席の方々のご都合・ご希望に合わせて日程を変更する事もあると思ひますが、変更時には、必ずその旨郵便物でご通知しますので、ご安心ください。

表題欄写真の解説

東大寺四聖図(重要文化財)

仏教が本朝に伝来してから、国家的プロジェクトで建てられた、奈良の東大寺「草創の方々を表した図画です。左上から時計回りの順番に、聖武天皇「菩提遷那僧正(インドの僧侶) 行基菩薩「良弁僧正」

この内、行基菩薩」は、この善導寺」の開山上人(最初にこのお寺を開いた尊い人)と伝えられています。

日本往生極楽記」という、極楽に往生された方々の記録がありますが、そこに「聖徳太子」の次、二番目に記されている方が、行基菩薩です。